



日々好日は信心から

弘法
非遥

心中
即近

日々好日

真如
非外

棄身
何求

日々好日

六七五号

(令和七年五月発行)

寺は海から五百メートルの所に位置していることは承知していましたが、工業団地の旭化成の建物が解体されて朝日にきらきら輝く海が間近に見えるようになりました。

三十年以内に80%の発生確率であるという南海トラフ地震では、岩国は四路の津波が襲うとされる。お寺は海拔六メートルのところにありますが、安全とはいえません。

岩国の海辺近くは江戸期の干拓地で低地である。津波に対応する堤防はもとより頑丈な避難所ともなりえる高層建造物も存在しない地域は広範囲にわたります。

南海トラフ地震では29万人の死者があると推測されています。ミャンマーの地震では三千人をこえる死者が出ていますが、死者数は桁違いである。

人の命の尊さは老若男女の区別はありませんが、日本の将来を担う子供の出生数が年々減少の一途なることを考えると子供の犠牲を抑える方策だけでも早急に講じてほしい。家具の固定化などは個々にできても、津浪の対策はできません。

愛らしい子供たちの通学姿を目にし、「こどもの日」を目前にしての思いである。

弘法大師のお言葉

「災(わざわい)を未兆に防ぐは賢聖の貴ぶところ、患至つて悔いるはこれすなわち愚なり。賊を防ぎ火を防ぐ、何ぞ遅滞すべけん」

(高野雑筆集 四十四)



転に際して堂宇を解体することもやむにやまれぬこととはいえ申し訳ないことだとの思いは消し去ることはできません。

そこで、内陣の檼の丸柱を保存し、新築の本堂内陣の結果とし、その端材をもって今回、二基の五輪塔を造立することが出来たのは新築の本堂に旧本堂建立の檀信徒の貴い信仰の息吹が引き継がれていることを知って頂きたいということでもありません。

それに加えて御拝の龍は旧本堂のものを用いていますし、阿吽の獅子と獺の彫刻は将来山門でも建立の機があればその時に用いたいと保管しています。

移転の決意表明をしたのは裁判途中の平成二十四年十月一日のことでした。その檀信徒総会では移転のご理解をいただき、その後は寺の境内地にふさわしい土地探しでした。

交通に便利で静寂な環境、加えて車での参詣を考慮して駐車場も確保できる広さが必要でした。この最低限の条件を満たす物件は卑近に見出すことはできません。

現在地を取得することができたのは好運でしたが、これはみ仏の導き以外には考えられません。その後の移転建築の経費の心配も土地の確保を上回るものではありませんでした。

宅地化や建築の許可や認可には日数を要しましたが、その間建築の業者もきまり着々と建築作業は錦帯橋架橋の作業場で進められており心強いものがありました。



移転の遠因は既に旧本堂の建立の際にも感じられたことでした。荒廃した観音堂の復興を託されての移転でその意趣に沿う本堂の新築でありながら、龍門寺の本堂ではなく尾津の観音堂だとの声が聞かれたことでした。

父もそのことは先刻承知で、為に寶池山という山号は出すことなく「平岩観音龍門寺」として対応してしまっていたので、父が平岩観音と名付けたものであり、その石標も父が建てています。揮毫は中山寺の長老である。

燻り続けていた彼らのそうした存念が年々膨らんできたということでしょうが、その態度が横柄になり総代を気取りながら、住職の意向を一切酌むことのない振る舞いに、耐え忍び難くなったということに尽きます。

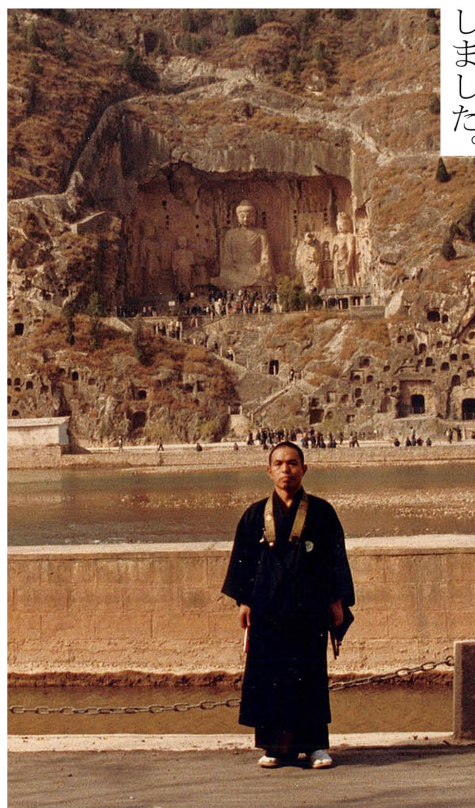
こうした軋轢の中、岩国市選挙管理委員という埒外の任務を委嘱され、五期二十年間も微力ながらも市政に貢献してまいりました。また、少年相談員に続いて保護司としてこれも二十年間更生保護に尽力してまいりました。これは弘法大師の教えをもつてすることでもあり手応えはあったように思っています。

また、父の遷化後、高野山修学を終えた弘昭が万徳院第十九世住職として晋山。以後、茶室品泉楼・永代納骨堂・山門の新築を主導してまいりました。

龍門寺も吉川公の岩国転封にともしない富田城下より移転して四百年の記念に広家公発願造立の彌勒菩薩像を修復。春日厨子（扉丈四尺二寸）を新調。



そうした中で昭和五十九年十一月には中国へ。弘法大師受法の地、西安の青龍寺を参拝。洛陽の龍門石窟も参拝しました。



またその翌年の十月には十四泊でインドの釈迦佛跡を巡拝。タイ・スリランカの寺院も参拝。これらの参拝は佛教徒としても真言宗の僧侶としても見識を深めるものであったことは疑いを入れない参拝旅行であった。

良くも悪くも様々なことを経験して人間としてまた僧侶として少しは成長したのでしょうか、高野山真言宗の宗会議員に選出されたのです。地方の弱小寺院の無学なお寺の住職の出る場所ではないことを自覚していましたから、宗政に関心を懐いたこともなくそうしたことからは遠ざかる行動をとっていました。

降って沸いたような話でしたが、当時の支所役員数人が突如来訪され適任者が他にいないと懇願されお困りのことで受諾。全国の著名寺院の住職と交流を深め、四年間宗政に携わりました。その退任後、時を措かず山口宗務支所長を二期六年間つとめました。

これらは寺移転にいたる煩極まるるときでしたが、任務を全うできたのは、高野山や鎌倉での修練の賜物だと思っ
ています。様々な難事に際してもそれに対処対応する

胆力のようなものが培われていたのだと思わないではありません。

これらの役職を退いて身軽になって移転事業に邁進できたのは好運というより目に見えぬ大きな筋書きにそって物事が進捗したように思えてまいります。

寺名義の土地を持たないことによる悲哀を経験した者にとつて、将来そのようなことを代々の住職が経験することがないようなことに重きをおいた移転事業であった。平成二十八年四月十日の本尊遷移・本堂新築落慶法要は私の法蔵七十三年の中でも特筆大書すべき法幸極まつた法要でした。

有難いことにその後、宗教法人の設立がなり、永代納骨の認可もなり、檀信徒に安心感と墓仕舞いなどに際して対応できる寺院となったことは喜ばなければなりません。

また、薬師如来をはじめ十数躰の諸仏を弘津善通氏より、また俱利伽羅不動尊と大師像を三代博幸氏より御奉納賜り本堂は真言宗ならではの曼荼羅の様相を呈し、左右の脇陣も面目を一新することができました。これも移転新築した本堂であったから可能となったことは申すまでもありません。

更にまた、インターネット上にホームページを開設し、月々の寺報を不特定多数の方々に見ていただけるように差配していただいている浦井弘子氏にも感謝の意を表したい。浦井氏は法人登記にも御尽力いただきました。

こうして檀家さんをはじめ多くの方々にも龍門寺に関心をもつて頂いて、お寺の護持がなされていることを実感することが出来たということでもあります。

五月十八日の移転十年記念法要はこうした幾多の方々
に心から感謝申し上げ、僧侶生活の集大成の機会である
との思いを込めて営みたい。

あとがき

今年も桜を観ることができたことを喜びたい。境内でも沈丁花・梅が続いて現在も赤や白の椿が咲いて目を樂ませてくれています。水仙も香気を放っています。この花々だけでなく春雨ごとに雑草も傍若無人の振る舞いのごとくはびこります。

その対策として舗装して駐車場としたのですが、それでも手に負えず本堂前などは雨水は浸み込む舗装もしましたが、未舗装のところもあります。

その雑草と作年まではいくらか向き合っていました。今年には家内が一人で対処しています。去年できたことが今年できないということはサボタージュしているようですが、抗いようのないのが現実である。

しかし車の運転と、お経がお唱えできるところで存在感はなんとか保っています。

そんな為体ですが、新聞に目を通し日本社会の日々の出来事、世界の動静が気になるのは未だ人間として僧侶としての心根は生きていくということであろう。

花咲く春のこの時期、新入生・新社会人の若々しい輝きが目にまぶしい。この輝きをいつまでも保ち続けてほしいものである。

五月十八日の移転十年の記念法要に向けて気力の充実を図っている今日この頃である。

発行者

高野山真言宗

宝池山 龍門寺

吉岡 光昭



娑婆にて慈悲の名号を

ひとたび

一度唱える功力にて

業にひかるる魂魄を

導き給え地藏尊



岩国市通津3634-3 ☎740-0044

高野山真言宗

宝池山 龍門寺 發行

☎0827-38-4611番